

第 12 号

発行日 平成4月10月1日
発行所 東京青山同窓会事務局
〒153 目黒区 東山1丁目3番1号401
(株)マルチメディア研究所内
TEL 03-3716-3622
発行者 阿 尻 威 吾

東京青山同窓会会報

東京会報

東京青山同窓会

東京青山同窓会
年間維持費

1口1,000円 2口以上(年間)
会計幹事 小林元雄(61回)
振込先 安田信託銀行 虎ノ門支店
普 4046552 東京青山同窓会
郵便振込口座 東京 3-26904

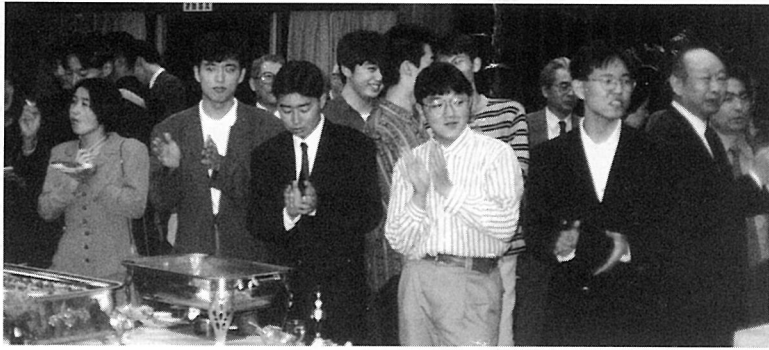
平成四年度

新人歓迎会・講演会開催さる

さる五月十五日(金)午後六時より、日本橋の東洋経済ホールにおいて、平成四年度第一回の講演会及び新人歓迎会が行なわれました。

開会の冒頭、斎藤伸雄会長(44回)より御挨拶があり、創立百周年に当たる今年の卒業生を迎える事は特に意義深い事との歓迎の辞を頂きました。

講演会には、講師に五十九回卒業の、読売新聞社編集委員、牛木素吉郎氏をお迎えし、「スポーツと日本の環境」との演題で、新人共々、お話を伺いました。講演会終了後、新人歓迎会が開かれ、大学生の松田巳和さん(97回)が歓迎の辞を述べ、又御多忙の中御出席頂いた斎藤英四郎名誉会長(36回)より、新



人への温かい、思いやりのある御話がありました。

引き続き、出席者中最年長の佐藤岩男氏(33回)の乾杯の御発声により、懇親会が行なわれました。今年は事の外、新人の出席者が多く、百名を超える新人と、五十数名の同窓生の皆さんとで、会場は溢れんばかりの盛況でした。

新潟から来賓として御出席頂いた、校内幹事の板倉浩先生、旧担当の皆川、赤野両先生等の御挨拶もあり、校歌と応援歌の合唱の後、新人の丸山奈津子さん(100回)の返礼の辞があり、閉会しました。

母校創立百周年の年に、卒業100回生を迎えての歓迎会でした。渡辺(72回)記

新人歓迎の挨拶

東京青山同窓会会長
44回 斎藤伸雄



私は、東京青山同窓会の会長をやっております斎藤です。皆さんは、母校が創立されて一〇〇回目の意義のある卒業生だとのこと、同窓会あげて歓迎の意を表します。若い人達が、大勢東京に出て来られ、これから活躍されることは、私どもとして

新人歓迎の言葉

97回 松田巳和



新人の皆さん、ようこそ、青山同窓会にお出で下さいました。私は、三年前、新潟高校を卒業して、東京へ出て参りました。

その頃は、あれもやろう、これもやろうと思っていました。もう四年生になってしまい、さっぱり、ものになりません。皆さんは、これからです。大学生生活に悔いが残らないよう、何かに打ち込んで見て下さい。この為なら、命をかけてもよいと思うくらい情熱を傾けられるもの、一スポーツでも、学問でもよいと思います。

慣れない東京での生活に、とまどいもあるかも知れませんが、熱い情熱をもって、大きな目標に向かって努力されますよう祈って、歓迎の言葉と致します。

も、将来が楽しみです、頼母しく思っております。

どうか、健康だけは気をつけて、伸びのびと、意義のある学生生活を送られるよう、祈ります。多少、言葉のなまりが気になることがあるかもしれませんが、大したことはありません。青山健児の意気をもって、力強く、粘り強く、頑張ってください。

新人に贈る言葉

東京青山同窓会名誉会長
36回 斎藤英四郎



と、頼まれたことがあります。

その時の幹事の方が、「新潟県人は、裏日本という言葉を嫌がるので、気を付けて下さい」と言うのです。私は、いざ壇上に登り、聴衆を見渡しているうちに、裏日本が嫌いだなんて、何たることか、という気持ちがむらむら込み上げて来て、「裏日本が嫌だなんて、とんでもない。表があるれば、裏がある。新潟中学の校歌に「裏日本の覇者として」とある。そんなけちな考えで、この大日本を背負っているのか」と、喝を入れたことがあります。

どうか、青山健児の気概をもって頂きたい。

まあ、気が引けることがあるとしたら、イとエがはつきりしないこと位でしょう。私は人から、「斎藤さんは、母のことを言っているのか、越後のことなのか分らない」と言われます。

私は、旧制高等学校へ入るまで、イとエは区別がないものと思っていました。

高等学校のドイツ語の先生から、「エヒ・ビンです」「君はイイ四郎なのか、エイ四郎なのか」と散々、しづめられました。

しかし、私は、イとエに区別があるということ位分かっていればよいと思います。社会に出て、引け目を感じることは全然ない、と私は断言します。

君知事(故人)とNHKの桜井洋子さんと対談したことがあります。NHKは正確な日本語を喋らないといけないそうです。新潟から出て来て、言葉に苦労しましたか」と聞いたところ、「最初は訛が抜けなくて困りましたが、しばらくしたら、何も気にならなくなりました」と言っていました。言葉の事は気にしないでいいのです。

最後に、私の好きな言葉を贈って、終りにします。

「明るさを求めて、暗さを見ず」ということです。失敗したとき、後悔しても始まりません。済んでしまった事は性がないのです。どうか、新しい船出にあたり、明るさを求め、夢をもって、失敗を恐れず、勇気をもって頑張ってください。

返礼の辞

100回 丸山奈津子



母に近い方々までの、幅広い年齢層に広がる先輩の皆様方に、温かく迎えて頂き、大変嬉しく思います。

高校時代とは様々な面で違いのある大学生活に戸惑いながらも一と月がたちました。この度の歓迎会の案内を頂いた時も、一体どんな会なんだろうと不安に思い、友達同志で相談して、会場におもむきました。

色々な友達との出会いがあり、色んな声援が、私達、新人のために、歓迎会を開催して下さいました先輩の皆様、本当にありがとうございました。

新潟高校の一卒業生として、私達も、多くの同窓生の皆様と永いお付き合いをさせて頂けたらと思います。

お忙しい中、私達、新人のために、歓迎会を開催して下さいました先輩の皆様、本当にありがとうございました。

平成四年度第一回講演会要旨

「スポーツの個性とチームワーク」

読売新聞社編集委員

59 回 牛木 素吉郎



席はいつまでも空いています。

クーパーさんは「オランダでは、前の方の席から埋まっていく。せっかく話を聞くのだから前に座わなければならない。選手たちは内気すぎる」と選手たちに前に座るようにいいました。

私は30年以上スポーツ記者をやっています。特にサッカーは個人的に好きなスポーツで熱心に取材しましたので、サッカーを題材に日本のスポーツの抱えている問題の一つを、お話したいと思います。

★クーパー監督の話

10年ほど前に、オランダの有名なサッカーの監督のウィー・ル・クーパーという人を日本に呼んで、講習会をやってもらったことがあります。

クーパーさんは、日本のスポーツ環境がいに非常に驚いていました。日本の少年たちはテクニックがいい、規律も正しい、体力的にもアジアの中ではすぐれている。栄養もよい。それに日本の社会は、経済力があり、組織もしっかりしている。

これで、日本のサッカーがなかなか勝てないのはおかしいと思議がっていました。

ところが、講習会をやっているうちに、クーパーさんは日本のサッカーが勝てないわけを発見しました。その時は、筑波大学と東京の帝京高校で指導してもらったのですが、グラウンドで指導するだけでなく、教室での話もありました。学生たちは教室に入ってきて、後の方の席から座っていきいます。前の方の

謙譲は、いいことではあります。自分の個性を積極的に発揮したがるのは、必ずしもいいとはいえない。これは学校の授業でも、同じことです。これからは、大学の教室でも出来るだけ前の方に座って、先生にどんどん質問をして、高い授業料を払っているのですから、積極的にそれを取り戻すようにお勧めします。

★ヨハン・クライフの話

自分が先頭に立って、積極的に個性を発揮することが大切だということをお話したわけですが、それでは、どうやってチームワークを保っていくことが出来るのかという疑問が出てくると思います。このことについて、オランダの有名なサッカー選手のヨハン・クライフから、聞いた話を、ご紹介したいと思います。彼は、一九七〇年代の前半に活躍した選手です。サッカーファンなら知らない人はいないと思います。

「自分は中盤でボールをもらったとき、次にするプレーが四つくらいイメージとしてひらめく。その中で最も適切なプレーを一瞬のうちに選ぶ」とクライフは言いました。この場合に重要なのは、創造力と想像力です。日本語では発音が同じになってしましますが、イメージションとクリエイティブな力です。この二つは、新しいものを作り出す時に表裏一体です。

クライフが、四つのプレーの可能性をイメージする時、そのイメージは、独創的なものでなければなりません。誰でも考えられるような決まり切ったプレーでは、相手のチームが、それを読んで守りを固めるからです。

しかし、この独創的なイメージに味方が応じなければ、パスを出してもつながりません。したがって、クライフのアイデアに

たがって、クライフのアイデアに

に就いて、他のプレーヤーが動かなければなりません。クライフが、四つの可能性をイメージしたとき、他のプレーヤーも次の可能性をイメージして、クライフの選択に一瞬のうちに応じなければならぬのです。つまりパスを受ける方にも、豊かなイメージと創造力が必要です。

積極的によりグーシップをと

り、個性を発揮しながら、チームワークが成り立つための条件が、このクライフの話の中に示されていると思います。

卒業五十年の思い出

50 回 瀬谷 誠



張しあう積極的なチームワークの時代ではないかと思ひます。

青山50回卒の我々も100周年を迎えるに当たり、改めて新中在学中に迎えた50周年の盛儀を思い起す。然し前年の十二月八日太平洋戦争の開戦といふ歴史的大事件に我が身を置くことになり昭和17年は正直重苦しい年だった。見ざる越の野は、ひろく吹く風清き青山や千古に尽きぬ長江のゆたけき流れのぞみつ、と歌って来た自由闊達質実剛健の校風が戦時一色に塗りつぶされてゆく毎日に焦燥感を覚えながら、50周年記念の盛儀も何となく我が魂に迫ってくるという感懐は起らなかった。青

陵文庫で一年下の手代木君の当時記念誌への寄稿「百尺竿頭一歩を進める」という一文が妙に私の心に引懸った事を記憶している。記念式典に美校（藝大）の羽賀修三さんの物言わぬ兵士の像が贈られて来た。軍国調に乗せられた彫刻というより「土と兵隊」を想起させる人間的親しみを感じさせられ等身大の木彫で刻みの陰影が未だに忘れられない。同期の高橋清君にこの事を先日尋ねたら記憶に余りないような事を言い乍ら実は彼はこの時から藝術の道に密に情熱を燃やしていたのであろう。メキシコオリンピックや最近ではコンプス大陸発見記念など国際的に作品を残し市制100周年で新潟の新市庁舎前広場にお弟子さんと連名のモニュメントを残された。同期生として誇に思う。同じ50回の本居文哉と平本穂の両君がいる。濃厚と剛気の対照的両人が海軍と陸軍に夫々身を投じ、前者は特殊潜航艇でシドニー湾に後者はソ満国境磨刀石に挺身切込隊小隊長として共に壮烈な戦死を遂げている。二人は文化的素養の極めて高い好漢だった。母校100周年を迎えこれらの友の魂も帰って来てくれて信濃河畔に自然と人工美の広場と橋と殿堂の魅力ある新潟が戻って来てくれることを念願する気持が切である。

七夕会

55 回 阿尻 威 吾



年に一回集まろう、ときめてから、二十五回目くらいのクラス会になるだろうか。

54回（四年卒業）、55回（五年卒業）併せて、四十五名の在席者も、一人、二人と逝ってしま

った。それでも、元気な十六名が七月七日、安田信託銀行市ヶ谷ハウスに集って来た。安達、新井、内山、上杉、加藤、腰野、後藤、高杉、高橋、中村（正）、中村（幹）、原田、星、守口、渡辺と私である。高杉（旧野田）、良寛研究家の新井（旧石附）は久し振りであった。

この歳なので、第一線を退いたものが多いが、それでも、内視鏡権威の小黒、経済史を論述する板橋、大手建設業で敏腕を振るう大成の倉茂、五洋の守口など、まだまだ、第一線で活躍している。

イソログゴルフ会

56 回 堀 藤四郎

昔ながらの新潟弁で喋り、飲んでは気炎をあげ、玲瓏の天を斉唱し、再会を約して散会した。

青山同窓会の中で五十六期組のまとまりは定評あるところだが、イソログと称するこの期の交流活動は本紙でも紹介されたことがあるので御存知の方も多いと思う。

その同期のゴルフ愛好者によって組織作られたのが、「五十六期ゴルフ会」であり、現在東京組三十、地元新潟組三十五名がメンバー登録している。

会の発足はS六一年と日は浅いが、それ迄に十年に及ぶ伏線もあつて会を重ねること三十数回におよぶ。正式大会としては東京二十二回、新潟合同で八回を記録している。

特徴は、正式大会の模様がワープロ刷り大会記として全会員に通報されると共に、そのインプリント記録が常に適正ハンデ修正の資料になる仕組みで公平化が期されている事と、副賞にスパゲッティ一年分とか、究極の薬用ラーメン一カ月分、或は調味料セットを参加者全員に進呈するという具合に、自社製品を提供してくれる御奇特のスポンサーが時折現れることである。その中の圧巻はマグネシウムドライバーとゴールドパターに続き、一振り2000Yの「アレックグアイアン2番」を寄贈してくれた畏友増田日軽金副社長であろう。

この争奪戦を三月に相模カンツリー倶楽部7番ホールで、この新素材Iに自信を持つスポンサーの希望を入れ、「一振り2000Y」をドラコン方式で実施したが、初触初振りの大方の御仁は力み過ぎてラフの中と云う状

況下で、シングルSが、その一打を遥か230Yとかつ飛ばし、見事にこの触れ込みを実証して濃緑に輝く2番アイアンをものにした。

ところで、この五十六G会も時にはとんでもない会名解釈をされ、誇り高いプレー会員の自尊心を傷つけることがある。昨春、新潟紫雲倶楽部で実施した合同大会の折、全般的に調子が悪く大叩きする者が続出する展開の中で、これに右往左往と付き合わされた気のいい年配のキヤディさんに「おみいーさんたちイソロクけいとはハーフで56叩くけいかね」と、真顔で尋ねられて返す言葉もなくガツクリしたと云う一幕がそれである。

今秋は、十月の日本海・中条・紫雲のシーサイドシリーズに続いて、十一月の相模定例大会が予定されており、誠に楽しい限りである。

友達方より来るで、その日がやってくるのを心弾む思いで待っている次第である。

同期会

61回 鈴木正三

平成四年六月六日、東京青山第六十一期会（昭和二十八年卒）を明治記念館（東京信濃町）にて開催した。

毎年六月第一土曜日に開催しているもので、今年はD組の幹事当番である。

卒業時D組をご担当いただいた松田一郎先生（生物）をお招きして、総勢約六十名が集まった。

司会進行は慣れた捌きの西澤君が担当。会合の進め方も新しいやり方を導入、先ずは四十年前の熱き血に燃える青春時代に気持ちを戻すため、杉山君の準備したテープの伴奏付きで、

我々が在学中の昭和二十七年開校六十周年を記念して制定された校歌「百里流れて……」を斉唱した。

次いでお元気な松田先生より恩師の方々のご消息、先生の最近のお仕事等を含めてのお言葉をお聴きし、更に同期の長谷川新潟市長より新生ロシアを含めた日本海経済圏構想の中核になりつつある故郷新潟市の最近の動きを伺い、乾杯の音頭は、マレーシアから参加の湯川君にお願いして、早速懇談に入った。



多々あるが、卒業以来三十九年振りの参加もあって賑やかな会合となり、四十年程をタイムスリップして昔を思い出しつつ、楽しい懇談を繰り広げられ、あつという間の三時間であった。途中、新潟から例年参加の江口君から開校百年記念事業の進捗状況等を聞き、故郷の発展振りに思いを馳せた。

今年にも増して元気な多くの同期生が集まってもらいたいものだ。楽しみにしている。

（第61期 鈴木正三）

卒業三十周年同期会

70回 花輪 治

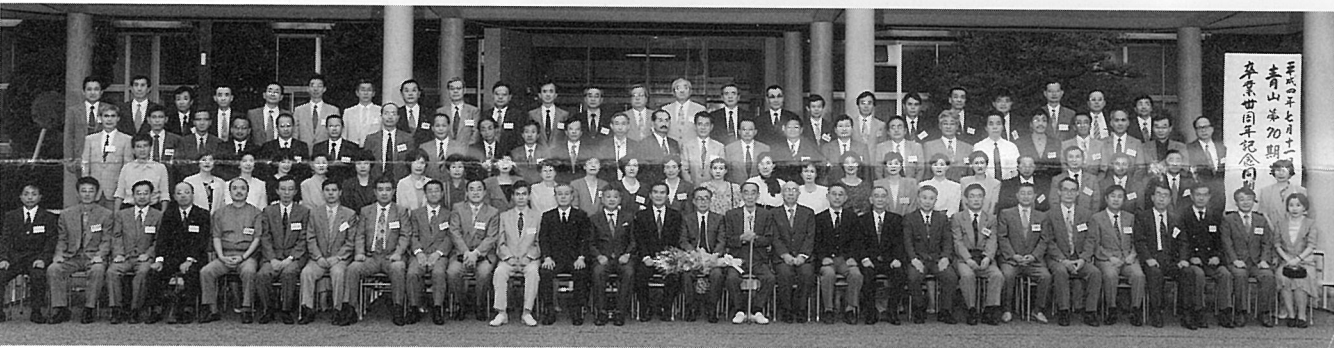
去る七月十一日、新潟で我々昭和三十一年卒の三十周年記念同期会が百三十五名の出席で行って盛大に開催されました。

第一部は午後四時母校に集合し、松浪先生の特別英語講義を受講し、高校時代をしっかりと思い出した上で次なる会場に移動。

午後六時半万代シティホテルに沢山先生や現校長の滝沢先生ら恩師十一名を迎え、遠く旭川から駆けつけた水上君の乾杯の音頭で第二部開宴となった。

関根先生や小黒先生のスピーチに笑い、懐しき再会に湧き、肩を組んで「青山……」の蜚声を張りあげ、夜の更けると共に二次会、三次会と新潟の街に繰り出し、果てるとも知れない同期会であった。

この七十回生は昭和五十七年に卒業二十周年に新潟で第一回の同期会を開催、以降五年に一回開かれ、今回で三回目である。一方、同期生は首都圏に百四十名も在住しており、新潟に帰れない会員にも再会の機会をという声があり昭和六十年に第一回東京青山七十回生同期会と銘打って開催されました。次いでこれも五年間隔ということ、平成二年に第二回目が催され、新潟から当時の校長宮地先生と関根先生そして母校で教鞭をとっていた坂井政行君の三方を来賓として迎えることができました。東京での出席者は約七十名で、大阪や京都からの参加者もあります。従って我々七十回生は新潟、東京の両方に出席すれば、二、三年に一回会えることになります。



更につけ加えれば、今年の女性出席者は二十四名でしたが、首都圏の女性達は年一回集っているとのこと。

沢山先生から「これだけ出席者の多い同期会は他の学年では見たことがない。」とお言葉を賜っております。

ゴルフコンペ奮戦記

72回 渡辺 毅之

二年後には卒業三十周年を迎える72回生ですが、去る八月十四日、新潟のフォレストゴルフクラブに於いて、東京・新潟合同の同期生ゴルフコンペを行いました。

お盆休みと言う事で、東京からは阿部史郎君、津野秋彦君、五十嵐孝寛君、そして私の四名が参加。一方、迎えうつ地元新潟勢は、渡辺国男君、高木弘一君、白井秀昭君、小林脩君の四



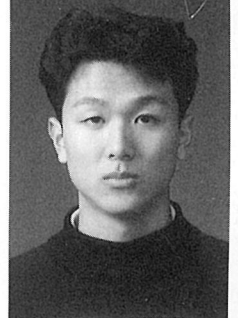
名が参加しました。

前日のどしゃぶり雨は上がったものの、カンカン日照りの中でのコンペでしたが、久しぶりに会う同期生同志、和気あいあいとプレイしました。ベスグロは42、44の白井君、他は非公開と致します。プレイ後は場所を変えての懇親会。たまたま、同じ店で青山テニスクラブのOB会があり、出席されていた石崎先生をお呼びして、懐しい高校時代の話を花を咲かせました。

同じ青山で学んだ同期生同志、幾星霜を経ても通い合う心は一つです。来年の再会を約して、散会しました。

サークル体験記

100回 藤塚 和弘



私は現在エアエステ（国際学生技術研修協会）に所属しており、先日サマーキャンプに参加してきました。欧米から日本の技術を学びに来ている研修生およそ五十名と、私たち日本人学生六十名の、計百余名が長野県の白樺湖に集結して三泊四日で開催されました。この間コミュニケーションの手段は英語が主体となります。外人はほぼ全く日本語を知りません。なにしろ彼らは日本の技術を学びに来たのですから、外人とともにゲームをしたり、アウトドアアクティビティやスポーツを楽しんだりして、技術だけではなく同時に日本の文化を理解してもらおう、私たちは日々努めています。そうしたイベントの企画、運営もその一環です。エアエステは世界六十箇国あまりにあり、主な活動は研修生交換を潤滑にするための、研修先企業や滞在施設への送迎です。運営費はすべて企業からのサポートで、渋谷のビルには事務局を構えています。エアエステはインカレ・サークルなのですが、活動は奥深いのです。私の入会動機はつかえる英語をモノにすることでした。七月に英検準一級の二次試験があったのですが、スピーキング力の無さを痛感しました。今回のキャンプではなんと宗教や政治の話まで取り上げられるようになりまして、今思うとその四日間是非常に充実したものでした。大学に入ってから確実に英語と接する時間が減りましたが、そのような経験は今しか出来ないでしょう。東京に出てきて得た一つの収穫でした。

ご案内

平成4年度 東京青山同窓会総会

日時 平成4年12月1日(火) 午後6:00～

会場 サンケイホール (5F)

千代田区大手町1丁目7番2号

(地下鉄大手町駅下車)

東京青山同窓会役員

名誉会長	斉藤英四郎	副幹事長	三崎 正一
会長	斉藤 伸雄		金山 常吉
副会長	豊岡 富栄	事務局次長	渡辺 毅之
幹事長	阿尻 威吾	事務局次長	石塚 英男
副幹事長	栗原 一也	会計	小林 元雄
	佐藤 良策	会計監査	林 博

らない。新潟で何か得るものがあつて初めて環日本海経済圏の一つの中核都市になれる。新潟市を中心とするエリアで、対岸

の人達が「これは面白い。勉強していい」というものがあつて然るべきだ。その面で市長が「新潟固有の文化を育てる」というのはいいことだと思う。もう一つは、新潟が対岸に与えるものは何かということ、それはやはり技術だ。新潟のきれいな水と空気、勤勉な労働力を生かして新しい生産技術を中心にした工業化を考える。これは単にここで物を作るだけでなく、そこで培った技術を基に対岸と技術協力していくこともぜひ考えたい。

倉茂 環日本海経済圏では日本、韓国の技術と資産、対岸の豊富な資源と労働力の相互補完が必要で、新潟の対岸には極めて広大な土地と人口がある。それを利用して新都市を建設することを考えたい。

具体的には、交通基盤の整備ができているところか、その場所にアクセスが可能かどうか、例えば五〇万から一〇〇万人規模のニュータウンだ。そうした魅力ある都市づくりには文化施設、商業施設、知育施設などが必要で、それを考えるとどうしても五〇万人程度の人口が不可欠となる。それは一つには地元のための都市なのであって、地元の自立のための力を持たなければならぬ。そのためには工場地帯を伴うような大きな都市であることが必要だ。

現在、私どもの建設業界だけでなく、海外での部品生産が真剣に進められている。例えばインドネシアでプレハブ資材を生産しそれを輸入した方が船賃を含めても、日本で工場を作って運ぶよりもはるかに安上がりになる時代になっている。だから新潟の対岸にその地を求められればなおいい。対岸にそのよう



な都市を作れば、インフラの整備から始めるにしても、まず必要なのは工場であり、住宅である。となると、例えば建築部品にしても飛行機で運ぶわけにはいかないので、船で運ぶ。その受け皿として、玄関口としての新

潟港のかなり大規模な整備が必要となるわけだ。

山城 今後、真つ先に進むのはシベリア開発、特に油田の開発だ。その際、開発資材がロシアに送られていく。NKKでも油田発掘用のパイプの発注を大量に受けている。今は支払いの問題がネックになっているが、サミットでも経済支援が示され日本も積極化する日は近い。その間、開発資材を運び出すために、インフラ特に新潟の空港と港湾をどのようにして国際的に役立つものに整備していくか。それが課題となる。

倉茂 さっき市長が言われた港と後背地を結ぶインフラの整備が必要となる。市としてもぜひ考えていただきたい。それに新しい都市を作るとなると、自然破壊など環境の問題もあるが、知恵を絞れば十分可能だ。

栗林 実は私、運輸省で航空とか空港の仕事をしたこともあり、空港に関連する問題からアプローチしてみたい。

新潟の場合、関越自動車道や上越新幹線もできており、空港も国内、国際線の拠点でもある。特定重要港湾という大事な港も

持っている。しかも、空港と海がこんなに隣接しているところは全国にもまれなことで、その意味で非常に恵まれた状況下にあると思う。しかし、これらの中で私が気になるのは空港の整備が他の地域に比べてどうも遅れているのではないかということだ。

現在、ハバロフスク、イルクーツク、ソウルへの三つの定期国際路線があり、チャーター便も飛んでいる。国内は、東京線は上越新幹線の開通でなくなったけど大阪とか福岡、札幌、名古屋などに飛んでいる。新潟空港は市の中心部から約八キロ。だから、他空港に比べてアクセス距離が極めて短い。しかも、新幹線や関越自動車道などを利用するのに極めて便利な位置づけにある。そうした状況の下で滑走路が二〇〇〇から二五〇〇へ延長する工事が行われている。

ちなみに、二〇〇〇の滑走路があれば国内線はどこにでも飛んで行ける。ただし、中型機以下で、ジャンボといわれるような大型機は飛べない。国際線は現行に加えウラジオストクをはじめ環日本海経済圏ならまあ問題は無い。それが二五〇〇になると、国内的には五〇〇席ぐらいのジャンボ機が飛べるし、国際的にもシンガポール、ハワイ、グアム、サイパンあたりまでは、まあ飛んで行ける。

環日本海 環日本海という湖みたいなもの。これがまず中核となつてその周辺をだんだん広げてヨーロッパに至るといふのが自然の考え方だと思ふが、空港の整備もこうしたことを念頭に置いて進める必要がある。したがって、滑走路も現在工事中の二五〇〇で大丈夫か、となる。例

えばモスクワへ直行するには三〇〇〇が必要になる。日本には現在、三〇〇〇級の空港は一二ある。これより長い四〇〇〇級は成田だけだ。多くの空港が三〇〇〇をめぐらしているのだが、日本側で言えば、北海道の札幌、即ち新千歳を一応三〇〇〇級に入れると、小松の金沢―防衛庁との共用だが、これも一応三〇〇〇をめぐらそうという動きがあるわけだが、現在の滑走路をそのまま延ばそうとすると、海港と密接な関係にあるために海港の機能を損うということがある。港側からすれば無理だ、困るという声が出てくるわけで、現空港の場所以外に適地を見い出すことができないのであれば、三〇〇〇にあるいはそれに準ずる滑走路にするためにはどうしたらいいのかということに緊急に考えなければならぬ。



これは平成八年度から始まる第七次空港整備五カ年計画に盛り込む必要があるか、もうあまり時間が無い。だから私は、今から取り組むべき緊急課題だという認識をしている。

もう一つは、環日本海諸国との関係が活発化するという中で例えば石川県や富山県などの日本海側の地域間競争が相当激しくなっているが、これはの各都市が話合つて連携協力するといふ役割分担の発想もあると思う。ただ空港の施設だけ作っても仕方ない。それは手段に過ぎないのだから、何よりも新潟自体の価値を一層高めることが必要だ。

長谷川 現在、国際貨物としてロンドン―ハバロフスク―新潟と、ルクセンブルグ―ハバロフスク―新潟という便があるが、これでオランダのチューリップの球根などが沢山入ってきている。ロンドンからは機械類などが多いようだが、重量のある貨物が多くなると、短い滑走路ではやはり不安だといわれている。二五〇〇になると、いったんハバロフスクで降りて新潟へと

いうやり方では十分だが、直接

域を作り上げていくことが必要だ。

栗林 空港自体は施設、内容とも均一的な性格を持っているため、私はいつも「空港を生かすも殺すもアクセスしだい」と言っている。利用者の側からすれば自宅を出てから飛行機に乗るまで何分かかるかということとで交通機関を選択するのだから、アクセスが重要になる訳がお分かりいただけると思う。その意味で高速道路、新幹線などと市街地への連絡がうまくいけば非常に画期的なことだと思う。新幹線が空港に乗り入れているのは全国に例がないことなので魅力的な話であつて、本当にそうするためにはどうしたらいいかを考えなければならぬ。

それから、通過点にしてはいかないという話の、アウトバウンドとインバウンドの問題にしても、例えばハバロフスクから貨物でも残念ながら新潟を中心とした需要は少ない。ほとんどが首都圏の需要で、成田に持つて行けばいいという貨物まで新潟に入っている。それはハバロフスク―新潟が唯一の路線であることと、成田空港の第二滑走路が未完成で発着枠がないことの結果だと思ふが、成田が完成した時どうなるのか。成田も一〇年後にはまた満杯になるとい

う話もあるのだが、それでも成田のすぐ近く―例えば来春オープンする福島空港もすでに成田の代替だと言っているわけで、他にもそうしたところが多くある。したがって、新潟が日本海側にあって海外交流の玄関になるのがいい。やはり、日本海側各地域との連帯と、東京をにらんだ構想とをどう組合わせていくのか。そのうえで、新潟空港利用の需要を確実に作り出していく努力が必要だ。とにかく、空港と地域が一体にならないといけない。通過空港ならまだいい。下手をすると「上空通過港」になりかねない(笑)。

司会 そのほかにも考えるべき点はいくつかあるが、高橋さんいかがですか。

高橋 今年五月にアフリカに行つて、その時エジプトで三つの役所に寄つて話を聞いた。三人の大臣がそれぞれに、だが、共通して言うことには「エジプトは地中海を控えてアフリカをバックにしてヨーロッパ、アラブ諸国に近くて、好位置にある国だ」と。だから「日本も、企業立地とかファイナンスその他種々のメリットがあるから有利だよ」という話をしていた。

二年程前に「デンマークにバツた時にも、政府の人間の話は「バルト海については非常な好位置にある」という話だった。今、環日本海経済圏のことを考えるに際して、よくよく日本海をめぐる地域でもこうした考え方が熟してきて、国際化の時代に入ってきたのだなということを実感している。したがって私も新潟は単なる交通の結節点ではなくて、新潟自体が魅力ある都市になることだという先輩方のご意見と同じだ。ただ、一般的に地方都市は情

報その他を東京に吸い取られてしまおうとされているが、私は樂觀的に過ぎるのかもしれないけれども、そろそろ地方の発展の時代に向けての転換期にきているのではないかと考える。東京は「住む場所」の限界にきている。一方、特に地方の中核都市は最近非常に魅力を増してきている。住むという生活者の立場からすると、地方都市志向が非常に出てきており、国の政策もそうした方向にいきつつある。私自身も早晩、人間は地方に張りつくようになると思う。

司会 そうなると、問題になるのはやはり地方中核都市のインフラですね。

高橋 そうだと思ふ。その時新潟という都市がどう位置付けられるか。他の地方都市との比較ではインフラ整備もまあ良くできてはいる。しかし、他の同じようなレベルの地方都市と比べると、新潟は街そのもののインフラ整備が不十分だと思ふ。

道路で言えばアクセスの問題で、市内への連絡が遅れている。いろいろな計画があり、それらが進められようとしていることも承知しているが、もっと力を入れてほしいこともある。例えば新潟クラスの都市でJR在来線で連続立体交差になっていない街は少ない。

また、下水道について普及率は三〇%ちょっとと低い。全国平均は約四四%、三〇万人から五〇万人の都市の平均は五一%で、五〇万人から一〇〇万人の都市は五七%だ。仙台市なんかは七九%にも達している。

それだけではない。公園の一人当たりの面積も全国平均では五・八平方メートルだが、新潟は三・六平方メートルだ。街路樹の環境面でのインフラはいろいろな意味でかなり遅れていると言わざるを得ない。

本場のところ、インフラよりも広い意味での文化が重要だと思ふのだが、文化は客観的にいいと発展しない。ソフトはしっかりとしたハードの上に成り立つのだ。街がきれいになると美人が多くなると言うが、新潟は元々美人が多いのでその点は心配ない(笑)。が、もっとも美人を多くするためにもインフラ整備が必要だということを感じ持っている。

それにつけても、信濃川は本場に貴重な財産だ。水辺環境に對する全国都市のニーズは非常に強いものがあって、それを考えると信濃川は大切に、誇りにしていきたい。

司会 中身の問題だが、新潟はどういう文化を築けばいい？

高橋 新潟にはもともといろいろな意味で多様性があった。いいのではないかと。現在は、選択の自由度という観点からみると、新潟は同一規模の都市に比べて単一の色かなあという感じがする。市長は高齢者にとつて魅力ある都市をと言われたけれども、それだけでなく若者にとつても魅力あるように心がけていくべきではないだろうか。

長谷川 ご指摘の面での環境整備が遅れているのは事実だ。しかし、これは新潟の地勢上の問題と切り離しては考えられないのであって、降った雨が市街地に貯まるという宿命にある。つまり信濃川に雨水を出すためにポンプで汲み上げて流しているのだ。中心市街地はほとんどそう。そのために直径三メートルから五メートルの太いパイプを使っているという特殊な状況がある。汚水も普通は三〇センチから五〇センチのパイプで間に合っているのに、新潟はこれまた太いパイプを使わなければならない。

年間維持会費納入者名 (平成4年1月1日～9月21日分)											
(32回) 曾我部 彦郎	(39回) 上原 誠一郎	(43回) 市橋 敏雄	(45回) 川村 明義	(46回) 稲野 三郎	(47回) 朝日 和郎	(49回) 赤松 敏雄	(50回) 竹田 忠夫	(51回) 岡笠 雄二	(52回) 見川 昇美	(53回) 石井 正二	(54回) 白藤 俊夫
(55回) 和斉 大蔵	(56回) 山本 修二	(57回) 本東 正光	(58回) 岸田 健信	(59回) 阿部 昌雄	(60回) 池田 厚司	(61回) 河熊 小相	(62回) 池田 健利	(63回) 小近 新吾	(64回) 小近 新吾	(65回) 小近 新吾	(66回) 小近 新吾
(67回) 小近 新吾	(68回) 小近 新吾	(69回) 小近 新吾	(70回) 小近 新吾	(71回) 小近 新吾	(72回) 小近 新吾	(73回) 小近 新吾	(74回) 小近 新吾	(75回) 小近 新吾	(76回) 小近 新吾	(77回) 小近 新吾	(78回) 小近 新吾
(79回) 小近 新吾	(80回) 小近 新吾	(81回) 小近 新吾	(82回) 小近 新吾	(83回) 小近 新吾	(84回) 小近 新吾	(85回) 小近 新吾	(86回) 小近 新吾	(87回) 小近 新吾	(88回) 小近 新吾	(89回) 小近 新吾	(90回) 小近 新吾
(91回) 小近 新吾	(92回) 小近 新吾	(93回) 小近 新吾	(94回) 小近 新吾	(95回) 小近 新吾	(96回) 小近 新吾	(97回) 小近 新吾	(98回) 小近 新吾	(99回) 小近 新吾	(100回) 小近 新吾	(101回) 小近 新吾	(102回) 小近 新吾

分、コストが非常に多くかかる。そのうえ、地盤が軟弱なところもあるし、昭和三十九年の大地震によって壊滅的な被害を受けたという歴史的経緯もあって、下水道の普及率は三二%という水準にとどまっている。とはい、私が市長になってから毎年一七〇億円を投じて年率三%（御国平均二%）の伸び率で頑張つて下水道の整備を進めている。

司会 交通ネットワークに弱点があるとの指摘はどうか。

長谷川 特に高速道路と市街へのつながりが必ずしもよくないというのは、残念ながら認めざるを得ない。新潟はこれから駅南側に発展していくわけ、それと古町といったところとの連絡とは強化していかなければならない。在来線の高架化も現在調査中で、今後の重要事業の一つだ。

司会 考えてみると、環日本海経済圏を構成する国や地域は皆、これまでは日本海に背中を向けてきた。日本は東京に目を向けてきた。中国もやはり北京の方が重要だった。ロシアもモスクワが何を考えているかが気になって仕方ないという形だったが、今度は皆日本海に顔を向けて、そして何が新しいものを作っていくかというようになったわけだ。

ただ今後、環日本海経済圏といったものができた時、あるいは作る過程で、いったい東京が指令を出すのか、北京が、モスクワが指令を出すのかというところ、そうではない。地方自治体が国際社会の一つの主体であるという認識が、かちりでき上がっている時代に入っているわけ、そこに住んでいる人々が中心になっていくという発想と姿勢が必要だ。その意味で、新潟が対外的にもリーダーの一角を占め続けていくべきだ。それが今日の結論というところになります。どうもありがとうございました。

「新潟に三千m滑走路空港を」一九八六年の君知事四選に当り今後は新潟共和国大統領として物事を考えるよう進言した。彼は既に健康を害し、氣力がなかった。既に新潟東港LNG発電所、上越新幹線、関越自動車道を完成し得意の絶頂にあったが東京中心であった。全世界を相手に考えることがなかった。栗林日航専務の主張する如く、三千m滑走路でB七四七機による貨客輸送は大変、欧州との取引に必要なものであり、現新潟空港の延長を検討しては断念している。信濃川国際空港については先日斎藤英四郎名誉会長と懇談し賛意を得た。小生の主張する信濃川空港は与板一分水町の中一km、長さ六kmの空港である。B747は三kmで可能である。その特色は、一、滑走路については土地買収不要である。直ちに着工できる。二、主たる騒音は川の方向に生じるので、民家に影響がない。三、長岡、燕三条を含む地域に従来の商工業に電子産業を主とする貿易産業が盛んになる。大宮―長岡は約一時間、大宮―成田は二時間以上。（新幹線）四、日本は緊急公共投資八兆円を迫られている。本空港は土地買収不要、直ちに着工でき、五千億円以上の土木建築費と五百



パネルディスカッションを聞いて 昇

万t以上の鋼材を使用する。五、成田は日本一の貿易港である。信濃川空港は商工業地へのアクセスが遥かに優れている。年一兆円以上の振興と人口五百万以上の発展が見込まれる。無理に二四時間空港を強制する必要はない。

難点があるとすれば、運輸省と建設省の協力を要することであるが、これは政治家の仕事である。田中角栄氏の出馬を願うものである。

48回 森 慶治 山城、倉茂、栗林、新潟市長の皆さんが新潟の将来の発展と活性化について、熱心に卓越した見識を披露された。郷土を愛する一人として大変敬服しました。心強い限りです。それにも拘わらず、少しばかり物足りなさも感じました。産業文化の振興、都市化整備道路交通は拡充されるでしょう。しかし、新潟が通過点とならないようにとの懸念が、山城さんによって指摘されました。これを克服するような発想を聞けなかったことが心残りでした。

東京圏集中に対し、遷都、首都機能移転、または、分散論が国民的関心となりつつあります。このような問題との係わりにおいて、新潟が名乗りをあげる位の気概が欲しかった。

新潟日報社東京支社報道部長竹田武英さんからのアンケートは、家を留守にしており締切日過ぎてから拝見したので御返事しませんでした。この機会に失礼の段お詫び申し上げます。

時宜に合った「パネルディスカッション」を企画し世話された幹事の皆さんに感謝しております。

戦中、戦後の古い時代の新潟に育った私としては、思い出に残る新潟が時代と共に変貌して行くことにはいささか寂寥感を禁じ得ないが、また一方、現在新潟が新しいチャンスと可能性を与えられて、大きなテーマに向って挑戦しつつある姿に接することは、極めて大きな喜びと誇りを与えてくれるものである。

61回 長谷川 耕一 母校の創立百周年の記念行事の一環として、東京青山同窓会の主催により環日本経済圏と新潟の将来を考えるパネルディスカッションが開催されたこと、誠に時宜を得た企画であったと思ふ。二十一世紀を展望して環日本海経済圏の形成とその中核的役割を果すべき新潟の熱い思いを述べられた長谷川新潟市長の基調発言に続き、当日のパネラー四氏からそれぞれ御専門の立場から極めて示唆に富んだ御提言があり、当日の参会者に裨益する処大であった。

日本海沿岸諸地域との将来の経済、文化交流は実務上極めて困難な問題を孕んでおり、また新潟が日本側の一つの拠点として機能するためには、今後交通運輸通信手段やその他インフラの一層の整備が必要であろう。先づ何よりも新潟が拠点として他地域よりもソフトウエアも含めて優れていると思ふ優位性に対する認知度を国内外共に高め、行くことが重要な課題である。

